

技をつなぐ

18

風間

(下)

■最高級の材料

ラタンには、丸籐(フレーム)、芯籐(編み)、皮籐(ピール編み、巻き)と使う部材が分かれる。その種類も多彩だ。

フレームに使われるトビチ、天然のホロー質で表面が覆われているセガ、直線的なフレームに使われるバタン、艶はないが着色に適したロンテイ、太く強靱さ(ようじん)で稀少なマナウ、バスケットなどの編み材に使われるウンフルなどがある。編みや巻き、フレームなど、それぞれ適した性質を持っている。風間はラタンの等級の中でも、マノウ、トビチ、セガの最高級の材料を使っている。

■選別の難しさ

フレームといっても材料によ

って、同じ力をかけても、曲がり方が異なる。手に持っただけで、曲げの深さも強度などを判別できて初めて、デザイナーの要求に応えられるようになる。風間の技を受け継ぐ丸尾長さん(72)は語る。

「デザイナーは図面を書いて、ここにこの太さとRがほしい、と要求しますが、私はこの太さではとても無理だよ、と答えることもあります。そこでディスプレイが始まるわけです。デザイナーと強度の一致点を探る重要なポイントといえる。」「お客さまに長く使っていたために、材料の選別が大切です。それができるようにな

「材料の選別が大切」と語る丸尾長さん



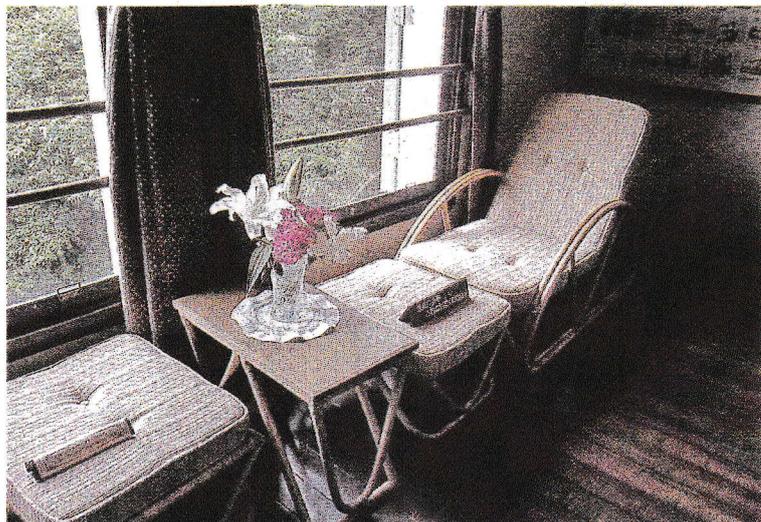
るには最低10年はかかります。強度が必要な椅子の座面には、それに耐える材料を選別する。その見極めには長い経験を要する。製品価格との兼ね合いも大切だ。風間の籐家具の名作は、丸尾さんと図面を描く才津俊朗さん(54)との、経験に裏付けされたディスプレイから生まれた。

丸尾さんと図面を描く才津俊朗さん(54)との、経験に裏付けされたディスプレイから生まれた。横濱クラシック家具を生んだ

元町で創業した風間は、中村友恵社長の父親にあたる2代目の展友さんのことから、横濱に残る洋館の復元作業に協力している。

中でも横濱市認定歴史的建造物であるエリスマン邸(横濱市中区元町)は、当時の1枚の写真から家具を作った。エリスマン邸は現代建築の父といわれるアントニン・レーモ

1枚の写真から作られたエリスマン邸の籐家具



ンド氏の設計で、1915年に横濱市山手町に建てられた建築史上でも価値の高い洋館として知られる。建築主のエリスマン氏は1888年に来日、戦後最大の生糸貿易商シーベル・ヘグナー商会の横濱支配人格として活躍した。

才津さんは1枚の写真から籐

家具の図面を起し、その図面を元に丸尾さんが制作した。まさに2人の経験と技が結集した横濱のラタンの息吹を伝える逸品といえる。このほかに山手11番館、ブラフ18番館などの洋館にも展示されている。

※「技をつなぐ」は今回で終了いたします。

横濱・ラタンの息吹